

「隠された宝」

マタイによる福音書 第13章44節～46節

説教 村上修平牧師

今日は天の国の話です。多くの人は死んだ後に行く場所のように思っていると思いますが、マタイによる福音書は、天国をどのようなものと言っているのでしょうか。ところで新約聖書の初めにはマタイをはじめ4つの福音書があります。この『福音』というのは、『よい知らせ』という意味です。では何がよい知らせなのでしょう。『天国は死んだ後に行く場所ではない。天国はもう既に始まっている。あなたが主イエスを信じさえすれば、その天国をこの地上にいなながら味わうことが出来る』という『よい知らせ』のことです。2千年前、主イエスが私たちの世界に来てくださったことによって、もう天国は始まっているのです。

今日の箇所には、非常に短いたとえ話が2つ記されています。「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。」(マタイによる福音書13章44節)よくよく読むと、この宝は隠されているということが分かります。宝は一見して目には見えないということです。

反対に、私たちの目に見えるものといえば、天国が近づいたことを疑いたくなるような出来事ばかりではないでしょうか。マタイによる福音書にも、多くの悲しく理不尽な出来事が書かれています。14章には、時のヘロデ王が、自分の気に入らない、しかし、正しい忠告をした洗礼者ヨハネを殺害した事件が描かれています。不条理なのは現代も同じです。学生時代、友人に電車賃をごまかすキセルはよくないと忠告したところ、逆に友人からバカ正直すぎると非難されました。正直者が認められず、損をすることになったことが往々にしてあります。また、13章の後半には、イエス様が生まれ故郷では敬われなかったことが記されています。私たちも、一番理解してもらいたい家族や身近な人に、受洗や教会へ行くことを反対され辛い思いをすることがあります。マタイはこのような悲しい現実を知っていました。しかし、この暗いニュースを打ち破るかのように『天の国はもう私達のそばまで来ている』ことを喜び溢れて記したのです。

カトリックのシスター渡辺和子姉妹は、『人生には、思いもかけない穴があくことがある(不幸な出来事がある)。それは大変つらいけれども、穴があいて初めて見えるものもある』と語りま

す。皆さんの中にも、今まさに『穴』を経験されている方がいらっしゃるかもしれません。しかし、その『穴』のために自分は不幸だと決め付けしないでください。その暗い穴の底で『希望の光を与えて下さい』と神に祈っていただきたいのです。神様は私達の祈りを確かに聞いておられます。そして、見えない宝を発見させようとしておられるのです。

それでは、見えない宝はどうすれば発見できるのでしょうか。畑に隠された宝の話には、どうやって発見したか詳しく書かれていません。一生懸命掘って探していたというより、たまたま発見したように書かれています。戦争が繰り返されていた当時、大事なものを隠すのに最も安全な場所は、土の中でした。そして雇われ人の農夫が一生懸命辛い労働をしていたその時に、宝を見つけたのだと思います。神様は、まじめに働く者の姿を、毎日の生活の中に見て下さり、何気ない日常の中で宝を発見させてくださるお方なのです。一方、真珠のたとえ話では、「商人がよい真珠を探している」(45節)とありますから、探し求めていたことが分かります。やっと本物にめぐり逢えたその喜びが書かれています。私たちは誰でも意味のある人生を生きたいと願い、探し求めているのではないのでしょうか。

以前、ある青年が祈りたいと教会を訪れ、この聖堂に入り『ずっとここに来たかった様な気がする』と喜んでいたことがあります。彼はようやく魂の拠り所、自分の居場所を見つけ安堵したのでしょう。彼は探し求めていた宝に巡り会えたのです。私は家族の救いのために一生懸命祈っています。父は、仏教を熱心に信仰しており、絶対に自分からはキリスト教を求めよう人ではありません。が、昨年のお正月に実家に帰った折、新年最初の食事の時に父が私に『お祈りしてくれ』と言うのです。牧師ですから、キリスト教の神に祈るのですが、父は『それでいい』と言うのです。奇跡的な出来事に驚きました。神様は私たち一人一人の願いや悩みを知っておられ、それぞれに違う仕方でも語りかけてくださいます。今も生きて働いておられます。天の国はそこまで来ている、今週もその喜びを味わわせていただきたいと主に願い求めます。

(記 説教要約奉仕者)